

東日本大震災における自衛隊の活動・任務

陸上自衛隊 東北方面総監部 政策補佐官

須藤 彰氏



【プロフィール】
1974年東京 doğul生まれ。
98年東京大学文学部卒業後、同年防衛庁（現・防衛省）に入庁。ケンブリッジ大学大学院留学、運用企画局運用支援課部員等を経て、10年10月より現職。

これは平成24年4月23日に、当所理財部会、不動産部会、工業部会、貿易部会の4部会合同で行われた講演会の一部を要約したものです。

私の主な仕事は地方自治体及び各省の出先機関と自衛隊とを繋ぐ調整役なのですが、震災発生後は、もう一つの仕事がありました。毎日被災地を回り、その状況を東北方面総監部の指揮官に伝えるという役割です。今日は、その仕事を通して感じたことなどをお話します。

自治体のあり方が 自衛隊の動きを左右する

我々自衛隊は通常、陸・海・空、3つの部隊に分かれて活動します。しかし今回の東日本大震災は非常に被害が大きく、被災された方々の人数も多いため、防衛大臣のもとに災統合任務部隊（JTF東北）をつくり、東北方面総監である君塚栄治陸将を指揮官として、その下に陸・海・空を置く形で運用しました。最も多い時には約10万6千人の隊員を投入し、さらに

共同部隊ということで、約2万4千人の米軍も共に活動しました。

震災時の我々の活動をお話する上で最初にどうしても申し上げておきたいことがあります。

本日、ここにいらっしゃる皆さんのほとんどは「震災の被害が大きかった自治体ほど機能回復までに時間がかかった」と思っていると思います。しかし、実際はそうではないんです。

津波によって、庁舎が流されてしまっても非常にスピーディーに復旧・復興活動ができた地区もあれば、庁舎や職員に大きな被害がなくても復旧にかなりの時間がかかった地区もありました。

被害の大小にかかわらず現場が平素の体制を保とうとする地区は緊急を要する話がなかなか首長さんに届かず、結果的に自治体の機能が低下してしまふ……。

つまり、自治体の機能回復のスピードは現場の応用力に比例していたんです。なぜ私があえてこのようなことを申し上げているかというと、災害対処の枠組みでは、自衛隊は、自治体の采配のもとに動かなければならぬからです。言い方を変えれば、動きの良い自

治体のもとでは、我々も良い動きができるということですが……。

しかし、部外者である我々が自治体に「こうしてください」とお願いしても、なかなか受け入れていただけない現実がありました。今後、もちろん我々としても、自治体との連携を更に深めていくつもりですが、このような災害が起こった場合には、皆さんからも自治体に対して率直に意見を言っていたいただきたいと考えています。

被災地を救った 予備自衛官と企業の団結

では、捜索の状況についてお話しします。人命救助や生活支援の実績については次ページの表をご覧ください。我々の仕事は瓦礫の片づけだけではなく、瓦礫を整理しながら、確実に行方不明者を捜索することでした。

しかし捜索が終了した場所に瓦礫の山が少しでも残っていると、ご家族は「もしかしたらこの下にわが子がいるかもしれない」とずっと気になってしまふんですね。

ですから、この下にはもう人はいな

いことがわかつている場所であっても、捜索を終えた場所には瓦礫を残さないよう住民に配慮しながら活動を続けました。

瓦礫の整理や捜索活動に必要な重機が不足していたため、現場では苦労しましたが、地元の建設会社の方々が重機を貸してくれたところもありました。このような協力なくして、ここまで早い復旧は成し得なかったと考えております。本当にありがとうございました。

お借りした重機の操作は、普段は会社務めなどをしていて、有事の際に招集を受ける予備自衛官と呼ばれる人たちも担当してくれました。

「予備」というと野球の「補欠」のようなイメージがありますが、特殊な重機を扱う作業は、現役の隊員よりも、普段から民間で活躍している予備自衛官の方が慣れている場合もありました。

そういう意味で、予備自衛官の皆さんには、彼らの特技に応じて、日頃の職場での成果を最大限に発揮していただいたと思っています。

また1カ月、2カ月と社員がいなくなるわけですから、予備自衛官を送り出す側の企業さんも大変だったことと思

ます。しかし、地域のため、被災者のため、皆さん快く送り出してくださったことに心から感謝を申し上げます。

米軍の力を借りて

次に米軍の活動についてですが、今思えば彼らにはもっと早く、いろいろなことをしてもらえば良かったと少し反省しているんです。

当初、米軍が来ると決まった時は、どんな機材を持っているのか、何人が来るのか、そして何より、どのようなマインドで来るのかがわからなかったということがあり、こまごました作業はお願いしてはいけないと考えていました。しかし直接、話を聞いてみると、「日本を助けるために来ているのだから、どんな仕事でもやらせてほしい。自分たちは裏方で構わない」と彼らからそう言ってくれたんです。そのため仙台空港の復旧など大きな仕事ばかりでなく、最終的には学校の片づけやシャワーの支援などもやっていただきました。

必要性が高まる メンタルヘルスケア

今まで私が話してきたことは過去の話ですが、これから重要になってくる事例としてメンタルヘルスの問題があります。これは自衛隊に限らず、被災者全般に言えることかもしれません、

特に自衛隊は、ご遺体を扱っているとすることもあり、精神的な負担は大きいものがありました。

捜索を始める時に、臨床心理士の先生の講義を受け、「感情移入をしないように努めてください」と言われました。しかし、感情移入しないというのは本当に難しいことですね。

今回、多くの被災地の皆様から「自衛隊は本当に良くやってくれた」という高い評価をいただきました。このことは私も非常にうれしかったです。隊員を誇りに思っています。では何が評価されているのかを考えてみると…。

例えば、隊員たちは、瓦礫の中から探し出したウルトラマンの人形を「これが唯一の子どもの形見なのだ」という思いで一生涯懸命洗い、お母さんに手渡すわけです。

そういう思いが「そこまでやってくれた」と評価されている点ではないか。つまり、今回は感情移入ができたから、良い活動ができたのではないかと、私はそう思っているのです。

ただ、その代償として、隊員の中には精神的に負担を抱えている者もいます。しかし、がんばってくれた隊員を決して見捨てることのないよう、我々も息の長い対応を続けていきたいと考えております。

東北方面隊は約2万人のうちの1万5千人が陸士、陸曹といわれる隊員です。それはどういう人たちかというと、高校を卒業してすぐに自衛隊に

入った隊員たちです。被災者と同じ思いをもって、ときには涙を流しながら、ご遺体やご家族と向き合ったのも、この多くの陸士、陸曹たちです。彼らが一生懸命やってくれたから、自衛隊としてうまく活動できたのだと私は思っています。

私の仕事は、隊員から困っていること、足りないものなどを聞いて手当てすることですから、彼らに「何か足りないものはないか」と尋ねても、「いえ、満足です」と、なかなか「これがほしい」と言わないんですね。

しかし、こんなに我慢強い彼らも、皆さんからいただいたお手紙を読みながら、ぼろぼろと涙を流して喜ぶのです。子どもから贈られた「じえいたいさん、ありがとう」というこれらのお手紙が、彼らの励みになったはずです。本日、私は代表としてお呼びいただきましたが、彼らがこのような場に出て来る機会はないかなありません。ですから、最後は彼らの代わりにお礼を申し上げます。この講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【表1】

■人命救助等 (実績)

	累 計	備 考
人命救助	19,300人	3月11日～26日の間、ピークは13日 (4,789人)
遺体収容	9,505人	死者全体 (15,790人) の60%
医療支援	23,370人	疾患は上気道炎 (風邪)、高血圧、花粉症等

■生活支援 (実績)

	最 大	累 計
給 水	211カ所	約33,000t
給 食	83カ所	約5,005,000食
入 浴	48カ所	1,092,526人